

第4回黎明研究報告会 を開催

先端基礎研究センター
岡田 激平

去る5月31日、6月1日の2日間、先端基礎研究交流棟大会議室において、第4回黎明研究報告会が開催された。また、研究評価委員会黎明研究専門部会（伊達宗行 部会長）も同時に開かれた。

報告会の発表内容や黎明研究の傾向などに関しては、別途、上記の専門部会報告が出されているので、本稿を、今後の報告会のやりかた等について考えてみる場としたい。というのも、今回の報告会の際、アンケートの回答をはじめ多くの貴重な御意見が参加者から寄せられたからである。以下に、それらを集約し、私見ではあるがコメントを添えて、今後の議論の一助と致したい。

1. 発表形式について

今回はじめて全発表をポスターとし、各発表につき2分間のショートプレゼンテーションを設けた。これは、実は苦肉の策であった。昨年強風で電車が止まり発表できなかった8件とあわせて、全件数が56件に及び、通常の口頭発表ではとても2日間に収まらなくなったからである。ところが、これが好評であった。発表者側からは、2分間のショートプレゼンテーションでは短すぎるという意見もあったが実際やってみると、まとめ方に工夫しさえすれば話のポイントがよく分かって良いといった意見も多かった。「良い研究はexcuseがないので2分間でアピールできる」ということでしょう。また、評価委員と発表者の双方から、ポスター会場で十分な議論が行えたことは有意義である旨の御意見をいただいた。

その他、「OHPが2台あれば、もっと発表しやすくなる」「ポスター発表者が他の発表も見られるようにコアタイムを設けては如何か」などの貴重な御意見が寄せられた。是非検討してみたい。

The 4th Progress Report Meeting on 'Reimei' Research

Sohei OKADA
Advanced Science Research Center

2. 報告会の開催時期などについて

これも昨年強風で電車が止まったことによる「瓢箪から駒」的な結果であるが、多くの参加者から、昨年の報告会で発表しそこなった10年度採択のテーマが非常によい成果に仕上がっており発表もまとまっているという御意見をいただいた。偶然優秀なテーマばかり発表しそこなったとも考えにくいので、期間の問題が関係しているのではないかという議論になった。このことがそのまま黎明研究の期間を現行の1年から2年に延ばすという結論には結びつかないだろうが、先行きの楽しみなテーマは再採択する（これは一部現在も行われている）、報告会の時期をもうすこし後ろにずらす、契約の時期を早めるよう努力するなどの方策について検討する価値があるように思われる。

3. その他

発表の中にごく一部ではあるが「どこかで見た研究」があるという御意見も多かった。本来黎明研究のテーマはコンパクトで独創的・萌芽的なものであるはずで、大きなプロジェクトや他の公募型研究の一部といった性格のものではない。にもかかわらず、その種のものが混じっているということである。しかし、事前評価の段階で評価委員が他のすべてのプロジェクトを把握しているということは至難の技であろう。情報公開の時代である。公募型研究や種々のプロジェクトのデータベースの構築が必要な時期に来ているのではないかと考える。

九州大学の大学院生達が、黎明研究は学生でも応募でき、そのおかげで自分達の研究ができると目を輝かせていたのが印象的で、清々しかった。